

史遊会通信

NO. 174
平成 21 年
3 月 14 日
発行

事務局
☎
03--3712
0651
下山田方

二月講演

十五〜六世紀の世界と日本

太田 精一

十五〜六世紀に始まった大航海時代以前のヨーロッパは、世界の先進地域ではなかった。

ギリシャ、ローマ時代を除き、ヨーロッパは、長い間、歴史の陰に隠れて眠り続けていたのである。ヨーロッパの存在感が高まったのは、大航海時代以後のことであり、世界の覇者となったのは、十九世紀産業革命を経た後である。

それまで世界は、相互に作用し合いながら、各地域が独立的な文明圏を構成し、完結した政治構造を持っていた。

十五〜六世紀頃の世界は、中国文明圏の東アジア、インド文明圏の南アジア、イス

ラーム文明圏の西アジア・北アフリカ、ビザンチン文明圏の東ヨーロッパ、キリスト教文明圏の西ヨーロッパ、中米のアステカ・マヤの文明圏、南米のインカ文明圏と七つの文明圏が並存していたのである。

その間、東アジアでは、明王朝の鄭和の船団が、十五世紀、西アジアから北アフリカまで足を伸ばし、活発な商活動を展開した。また、西アジアでは、ティムール帝国

とオスマン帝国が国の存亡を賭けて、互いにしのぎを削っている。ティムール帝国は、その後東西に分裂、一五〇〇年に滅亡した。

そのすぐ西では、ローマおよびオリエントの文明を引き継いだビザンチン帝国が、

例会のお知らせ

◎ 3月例会

日時 平成21年3月25日(水)

午後6時〜8時

会場 目黒区民センター 7階

社会教育館 第2研修室

講演 高橋由貴彦氏

テーマ 「マテオリッチの世界図を中心にして」

自由執筆は三戸岡道夫・瀧澤中・

島津隆子の諸氏。締切り 3月末

◎ 4月例会

日時 平成21年4月22日(水)

午後6時〜8時

会場 目黒区民センター 7階

社会教育館 第2研修室

講演 千坂精一氏

テーマ 未定

自由執筆は柴田弘武・山本鎮雄・

鯨游海の諸氏。締切り 4月末

バルカン半島への進出を図るオスマントルコとの熾烈な争いに敗れ、千年の栄華の幕を閉じた。

西ヨーロッパでは、ベニス、フィレンツェ、ナポリなどの都市国家が、地中海貿易で西アジア、東南アジアの物産を扱い、富を蓄え、ルネッサンス期を迎えていた。

一方、ポルトガルとイスパニアは、レコンキスタ（国土回復）の旗印を掲げ、イスラームをイベリア半島から追い落とし、その勢いを駆って、地中海貿易に割り込むようになった。しかし、オスマントルコ帝国がその行く手に大きな壁として立ちはだかつていた。そこで、両国は、大西洋を西に航海することによって、インドや東南アジアの産品を入手しようと考えた。

十五世紀末、イスパニアは、大西洋を西に進んでアメリカ大陸へ、ポルトガルは、喜望峰を回って、インドに到達した。大航海時代の幕開けである。

アメリカ大陸には、アステカ、マヤ、インカといった古代文明が栄えていた。だが、国内における各部族間の対立、古代国家に見られる呪術的統治機構など、社会的な慣習、制度が足枷となって、武力に勝るイス

パニアによって征服された。ヨーロッパ大陸から持ち込まれるさまざまな伝染病も、人口の減少をもたらし、国力を低下させ、滅亡を早める要因になったのである。

イスパニアは、これらの国々の財宝や土地を奪い、各地の鉱山を開発することによって金銀銅を産出し、東南アジア、中国貿易の代価としてこれを使用した。

一方、ポルトガルは、インドのゴアに拠点を設け、後にシヤム、マラッカなど東南アジアの各地に進出し、綿や胡椒などの香料をヨーロッパに運んだ。ところが、ヨーロッパからの輸出品は限られていた。鉄砲などの武器と毛織物の需要はなかった。アジアには、毛織物の需要はなかった。

そこで、海運力を使った貿易網を構築し、インド・東南アジア、日本・中国、ヨーロッパにまたがる三角貿易を展開した。

こうして十五、六世紀半ば頃までは、ポルトガル、イスパニアは、世界の海に君臨した。ところが、十六世紀末、イスパニアから独立したオランダが、新興国として歴史の表舞台に登場する。ジャワ、スマトラ、マラッカ、日本に拠点を設け、次第にポルトガル、イスパニアの商圏を侵食したのだ。

その後、英国艦隊が、イスパニアの誇る無敵艦隊を撃破し、インド、東南アジアに進出するとともに大西洋を越えて北米大陸に到達し、植民活動を行っている。

東ヨーロッパでは、ビザンチン帝国が、一四五三年、オスマントルコに滅ぼされ、その文明が、新興国ロシアによって引き継がれた。そのロシアは、十六世紀末ウラル山脈を越え、シベリア進出を開始している。

西アジアは、イスラームによる帝国が、それぞれ英邁な君主を輩出、国力を誇示している。オスマントルコのスレイマン大帝、インド・ムガル帝国のアクバル大帝、ペルシャ・サファヴィ朝のアクバス大帝である。いずれも十六世紀から十七世紀にかけて、強力な国家を率い、領土を拡張した。

ヨーロッパは、これらの強大な政治・軍事力を持つ国とは対抗できなかった。東南アジアの豊かな物産を手に入れるためには、これらの地域を迂回せざるを得ず、活路を海に求めたのである。

日本もまた、海洋国家として、中国、東南アジアに乗り出している。十三世紀末、元寇による被害を受けた日本は、外国の存在が、強く意識されるようになった。元寇

国内における各部族間の対立、古代国家に見られる呪術的統治機構など、社会的な慣習、制度が足枷となって、武力に勝るイス

史の表舞台に登場する。ジャワスマトラ、マラッカ、日本に拠点を設け、次第にポルトガル、イスパニアの商圏を侵食したのだ。

南アジアに乗り出して、十三世紀末、元寇による被害を受けた日本は、外国の存在が、強く意識されるようになった。元寇

によって困窮した九州の武士や庶民は、海商となって朝鮮、中国の沿岸に出没、密貿易や海賊行為を行い、倭寇として恐れられていた。倭寇には、中国人、朝鮮人で構成する集団もあり、必ずしも日本人だけではなかった。

十五世紀初頭、足利幕府の三代将軍義満は、幕府財政を豊かにするため、対明貿易を積極的に進めた。明が正式に許可する勘合貿易を利用しようとしたのである。そのためには、明の冊封国となる必要があり、「日本国王臣源道義」と書いた国書を明に送った。それに応え、明の永楽帝は、「日本国王之印」を与えて日本を冊封国とした。義満が明の冊封を求めた理由は、単に貿易上の利益だけではない。明の権威を借りることで、国の内外に認知されることを望んだのではないかと考えられる。

東アジアの国々は古くから中国と冊封関係を結び、中国の外藩の王として、歴代の中国王朝に臣下の礼を尽くしてきた。十五、六世紀には、朝鮮、シャム、安南、琉球など中国周辺の多くの国が冊封国となっている。

日本は、「邪馬台国」の頃には、魏の冊封を受けた。それ以後、飛鳥、奈良、平安、鎌倉時代を通して、中国の歴代王朝に、冊封を求めなかった。義満の行為は異例なこととして、国内の批判を浴びた。しかし、義満死後も勘合貿易の魅力は、絶ちがたく一五四七年、ポルトガル船の来航する直前まで冊封関係は続いたのである。

東アジア諸国がこぞって冊封を受けたのは、貿易上の利益と国防上の利点があったからである。中国は、冊封関係のある国が朝貢してきた場合、朝貢品以上の文物を見返りとして与えている。そのため、貿易上はむしろ持ち出しになることが多かった。

また、冊封関係にある国が、他国から侵略された場合には、救援軍を送らねばならず、経済的、軍事的に、負担を感じることも少なくなかったのである。

日本は、室町幕府が倒れて後、安土、桃山、江戸時代を通じて中国とは冊封関係になかった。したがって十六世紀半ば以後は中国との正式な外交関係はなく、明治期を迎えたのである。だが、長崎港に限定して中国船の入港を認め、貿易は行っていた。

一方、朝鮮とは、徳川政権になってから、国交を回復した。朝鮮は、朝鮮王と名乗って通信使を日本に派遣している。冊封国でない日本は「王」と名乗ることによって、中国の朝貢国ではないかとの誤解を招くことを恐れ、「大君」という言葉を使った。

江戸幕府は、当初、朱印状を出して朱印貿易を行っていた。実質的には、東南アジアの各地で中国品を仕入れ、中国向けの日本品をそこで売り捌いていたのである。

清朝との交易は、外藩の国王の印文を携行するものだけが許された。日本もまた、中国から直接来航する船の長崎入港を禁じていた。日中貿易は、国交のないまま中国船が長崎に来航し、行っていたのである。最大の貿易品は日本からの銅、中国からの生糸と書籍であった。

書籍は、江戸時代の文化に大きく寄与している。漢籍の輸入により、教学としての儒学が幕府支配体制の精神的な支柱となったのである。

十七、十九世紀の間にヨーロッパは産業革命と植民地獲得競争により、経済力と軍事力を強化し、他の文明圏の経済・軍事パワーを大きく引き離した。

日本もこの間、近代技術、軍事力の面で大きく水をあげられた。だが、国内の平和と安定が独自の社会、産業システムを形成し、同時に、長崎から入るヨーロッパや東アジアの動静は、幕府、有識者の間にも届いていた。そのため、他の国々に比べ、近代化への準備が整っていたのである。

黒船の来航は、確かに日本全国を震撼させた。しかし、わずか三、四十年の間に、ヨーロッパの経済、社会、政治システムを導入することができたのは、十五、六世紀の対外活動がもたらした余映と海外情勢を把握する窓口が開いていたからである。

十九世紀になって、ドイツの歴史学者ランケが、ヨーロッパ中心の世界観にもとづく歴史を発表した。ときあたかも、マルクスの経済発展段階説や、ダーウインの進化論が高く評価されている時代である。

明治以来の日本の歴史教育はこのランケの影響を大きく受けてきた。そのため、世界の文明は、ギリシャ、ローマ以来今日までつねにヨーロッパ中心に動いてきたような錯覚を起こしてしまったのである。

そうした世界観を改め、これからは、多極的な文明圏の相互作用の歴史として、世

界史を見直すことが必要ではなからうか。そうすることが、欧米的なグローバル化の進む多様な地域の摩擦を和らげ、共存を促す有効な手段の発見に繋がるものと考え、次第である。

自由執筆

山田寅次郎と明珍作の

甲冑のこと

中込 勝則

私は平成二十年五月の史遊会での講演の中で、日本トルコの親善に力を尽くした山田寅次郎のことと、彼がトルコに渡る際に家伝来の明珍作の甲冑を持参して皇帝アブドウル・ハミト二世に土産物として献上し、それが今もトプカプ宮殿の宝物館に飾られていることに触れましたが、「山田寅次郎なる人物」と「明珍」という甲冑師の家について、その後少し調べてみましたので申し上げます。

そもそも山田がトルコに渡ったのは次のような事件が契機でした。一八八九年（明

治二十二年）、トルコ皇帝が、日本との親善のために派遣した使節団が帰途、彼らが乗っていたトルコ軍艦エルトゥール号が和歌山県串本沖ではげしい暴風雨にあつて難破し、地元住民の献身的努力の甲斐なく乗員約六五〇名のうち五百余名は死亡し、助かったのは六九名のみという、世界海難史上タイタニック号事件につぐ大惨事となったのです。

この事件はトルコはもとより日本国内にも深い衝撃を与え、明治政府は、軍艦「金剛」「比叡」を派遣して生存者をトルコまで送り届けることとしました。当時二四歳の山田寅次郎は新聞社などの協力を得て全国を奔走して義捐金を募りました。（トルコにはエルトゥール号事件の遭難者の子孫も多く残っており、彼らには事件は今尚風化せず、串本で五年毎に慰霊祭が行われ、昨年はトルコ大統領も参加しました。沈没船の遺品引き上げなどが行われています。）では山田はどんな人物だったのでしょうか。

彼は、明治維新が起こる二年前の慶応二年（一八六六）、沼田藩江戸家老中村雄右衛門の次男として江戸に生まれ、明治十四

な錯覚を起こしてしまつたのである。

そうした世界観を改め、これからは、多極的な文明圏の相互作用の歴史として、世

上げたいと思います。

そもそも山田がトルコに渡つたのは次のような事件が契機でした。一八八九年(明

彼は、明治維新が起こる二年前の慶応二年(一八六六)、沼田藩江戸家老中村雄右衛門の次男として江戸に生まれ、明治十四

年(一八八一)、茶道宗偏流家元の山田家に養子に入りました。宗偏流とは、千利休の孫の千宗旦の高弟山田宗偏(一六二七-一七〇八)を流祖とする茶道の由緒ある家柄で、宗偏は、武者小路宗守・表千家宗左・裏千家宗室と並んで、「宗旦四天王」と呼ばれ、宗旦より「侘び茶」を学び承継した人物です。

現在日本の茶道の流派はこの四人が起したそれぞれの流派、即ち、武者小路千家・表千家・裏千家・宗偏流の他に、藪内紹智を流祖とする藪内流と、古田織部の流れを汲む遠州流小堀家があり、これらを合わせて「現代茶道六流」といいます。

寅次郎は、当然将来は家元を継ぐことを期待されていたわけですが彼はあまり茶道に関心を示さず、今風に云えばフリージャーナリストのようなことをしていたらしく、そんな縁で遭難事件が起つた後、熱血漢の彼は各地新聞社の支援などを得て全国を遊説して当時の金で五千円(現在の通貨価値でいえば一億円)という義捐金を集めました。これをトルコ側に渡すについて、当時の外相青木周蔵の意見に従って、義捐金手交のためにトルコに渡つたのです。トルコ

で大歓迎を受けた後、皇帝から「この地に止まってトルコ国民に日本のことや日本語を教えてくれるよう」要請され、長い間現地に在住し、貿易会社を営んだり、日本語を教えたりして、第一次世界大戦で情勢が不穏になって帰国するまで現地に暮らし、大使の交換がなかつた時代の両国の間いわば民間大使の役割を果し、日本とトルコの親善に大きな功績を残しました。この間明治三十八年(一九〇五)には、日本に一時帰国し、その際大阪に於いて東洋製紙会社(王子製紙の前身の一つ)を興したりしています。

第一次大戦後日本に帰つた山田は、製紙業に専心して関西実業界に於いて活躍し、昭和二年には吹田製紙(現三島製紙の吹田工場)を創業し、昭和十一年には三島製紙と合併して、同社の社長・会長を歴任しました。

これらを見ると、彼は茶道の人というよりも実業人としての資質が勝っていたようです。宗偏流家元は、先代が死去後四十年間も空席となっていた為、弟子達から懇願されて大正十二年(一九二三)、彼が五七歳の時に家元を継ぎ、第八世宗有を名乗りま

した。

一方、山田が、日本から持参してトルコ皇帝に献上した家伝来の「明珍作の甲冑」とはいかなる由緒のものでしょうか。これは姫路藩主に仕えていた甲冑師明珍家の手になるものです。明珍家といえ、古くから甲冑師として名高く、楠正成の鎧兜、武田信玄の「諏訪法性の兜」など鎌倉から戦国時代の多くの武将の甲冑を作っています。源平時代、後白河天皇の前の近衛天皇(一一四一-一五五)に鎧轡を献上して「音響朗々、光り明白にして玉の如く、類稀なる珍器なり」と賞賛され、「明珍」の姓を授かつたという由緒ある甲冑師で、一族は姫路のほか小田原などに於いて代々甲冑製造を営んで栄えました。山田家にいつの頃よりかこの「明珍作の甲冑」が伝わっていたものと思います。

この由緒ある明珍家も、明治に至って甲冑では生業が成り立たなくなつて、姫路明珍家は鍛冶技術を生かして火箸の製作を開始し、これも当りましたが、燃料がガスや石油の時代になると火箸も需要がなくなつたため、近年は「火箸風鈴」を考えつきました。火箸四本のまん中に軽い振り子をつ

るし、わずかな風でも振り子が火箸に当たって妙な響きを発する「火箸風鈴」は、その音のよさで姫路の名物土産となつていきますからご存じの向きもあるうかと思えます。勿論、風鈴以外にも応用され、料理箸・ステッキなどに現在まで継承されています。私は十数年前、娘の結婚前の思い出にと家内と三人で奈良や姫路の方面を旅行した際、姫路駅で列車待ちの時、土産物店に

たくさん「火箸風鈴」が売られていて、珍しいものだとは思いましたがそれ以上気にも止めずいたのでしたが、それはこうした歴史の伝統から生まれた物だったので。永年祖業であった甲冑製造で鍛えた鉄に関する技術が、時代の変遷を潜り抜けて現在まで継承され、いろいろな分野に今も尚生かされ応用されているということは偉大で且つ興味深いことです。

自由執筆

維新への胎動

平山 善之

N君 ご無沙汰しています。お元気ですか。私はまだ社団法人佐倉市社会福祉協議会の諮問委員を拝命しておりまして、時々佐倉へ行きます。協議会のY会長は、元陸上自衛隊の将官で温厚かつ毅然とした紳士ですが、先日会長室で雑談のおり、興味深いお話を伺いました。

Y家のご先祖は野州真岡の郷士だったそうです。寛永四年(一六二七)、春日局の

もと夫、稲葉正成が大名に列せられ真岡二万石を領し、家臣を徴募した際これに依じて、稲葉家の家来となりました。正成と春日局の間生まれたのが嫡子稲葉正勝、累進し小田原城主になり、その子正則は老中にまで栄進。その子正往は小田原から越後高田に移封、元禄十四年(一七〇一)、同じく老中に就任し、すぐ佐倉移封となります。この時、Y家のご先祖も主君に従って初めて佐倉にきたというわけです。

ところが、享保八年(一七二三)、山城・淀城主松平乗邑が老中となり佐倉へ、稲葉家は淀へと移封されると、Y家はなぜか佐倉にそのまま残ったそうです。普通は浪

人するか武士を止めるのですが、そのまま松平家に仕えました。乗邑は八代將軍吉宗の享保改革を補佐し、実権を振りました。延享二年(一七四五)、山形城主堀田正亮が老中に就任、松平家と入替えに佐倉城主になると、またY家のご先祖は佐倉に残り、新城主の堀田家に仕えます。

かく二度にわたり主君を変えたというのはどうしてか。名臣として新城主に請われて残ったということもあり得ますが、しかし「都度、禄高は減らされたそうですかね」と、Y氏はいわれたので、どうもY家から希望したようです。余程佐倉が気に入っていたのでしょうか。或いは偶々二回とも旅が出来ぬ事情でもあったのでしょうか。

以後は堀田家が相次いで明治に至り、明治初めの頃、Y家当主はアメリカで写真の修業を積みました。帰朝後、初め東京で、その後佐倉で写真館を開業されます。新時代に即応していったのは日米修好通商条約の立役者、堀田正睦の家臣教育の結果でしょうか。佐倉には連隊がありましたから、兵士や面会家族の記念写真をとる人が多かったようです。私が子どもの頃もY写真館は盛業を続けていました。

お話を伺いました。
Y家のご先祖は野州真岡の郷士だったそうです。寛永四年(一六二七)、春日局の

・淀城主松平乗邑が老中となり佐倉へ、稲葉家は淀へと移封されると、Y家はなぜか佐倉にそのまま残ったそうです。普通は浪

兵士や面会家族の記念写真をとる人が多かったようです。私が子どもの頃もY写真館は盛業を続けていました。

さて、私が右の話で興味深く感じたのは、封建時代の「忠節」という観念の変化、亦「藩」の法人化というものをそこに観ることができると思っています。

司馬遼太郎は言います。「幕末の志士たちが使う「藩」ということには「法人」というニュアンスが含まれている。徳川初期には、福島左衛門太夫家来何の誰兵衛、細川越中守家来何の誰兵衛であって、肥後藩、熊本藩の何の誰兵衛とは言わない。

「肥後藩・熊本藩」と言い出したころには、すでに藩主は象徴化され制度化されて藩主も藩士たちも自然人ではなくなっている」(「手掘り日本史」・集英社文庫)

明治維新の原動力となった西南雄藩ほどその傾向が強かったといえます。封建制を打破するには、主君個人への忠節を脱皮し、藩或いは日本国という「組織」への忠という概念をもつことが必須で、これこそ明治維新の源だったのではないのでしょうか。なぜ「法人としての藩」という見方がでてきたかについては長くなりますので、また。

自由執筆
興津、坐漁荘

松川 博光

坐漁荘は昭和前期の最後の元老、西園寺公望の別荘で、中心から離れた所から政治をコントロールした権力の館でもあった。そこは後継の首相が決められる場として、西園寺が健在のとき、機能していた。

近代日本の立憲君主制は明治憲法と国会開設により成立した。制度と運用は伊藤博文ら薩長藩閥勢力が実権を握り、行われた。大日本帝国憲法のもとで、天皇をいかに守りぬぐかに、西園寺は腐心した。元老は明治後期から昭和初期にかけて政界の最高首脳であった重臣で、勅命により任命され、国家の最高政策の決定に携わった。

内政、外交と軍部統制が軌道に乗り、政党内閣が続いている間は、興津詣での政治家、軍人等や、私設秘書からの情報で対応するという政治スタイルが確立した。

西園寺は一九一九年、パリ講和会議全権委員の仕事を終えて帰国後、この別荘に移住した。坐漁荘は住友家の費用で建築され、彼の実弟の住友友純から西園寺に提供され

たものである。渡辺千冬による命名は、周の文王の故事の一節を進めたものである。(群漁者有 一人坐漁 群漁に一人坐して漁する者あり)

衆議院の多数党の指導者が組閣するといふ慣例が確立していなかったが、西園寺は元老として権力を持ち、後継首相推薦のルールを作った。彼は元老の再生産に反対ではなかったが、首相を経験、派閥から離れ、世論を考慮、政党の台頭に対応、公平な立場で後継首相推薦を行う人材がいないので、ポスト元老を決めなかった。

一九三二年、五・一五事件後、軍閥内閣の時代に入ると、政府・軍・宮中の中枢で形成されていかなくはならない昭和天皇の権威が揺らぎ、軍へのコントロール等、国家統治が不安定となる。西園寺の健康も低下して来た。重臣会議に比重が移り、近衛文麿への期待が高まる。

西園寺は壮年華族の中で、近衛に最も望みをかけていたが、ここぞと言うときに受けて立つ勇氣を見せなかったため、失望している。自分は同じ公家として、岩倉具視の期待に応えるべく、伊藤博文を支えて全力を尽くしてきたのに、この気持がどうし

て近衛には伝わらないのか、もどかしさがあつた。西園寺の近衛内閣への淡い期待も、戦火の拡大で失望に変わる。元老一人の力には限界があつた。

時局は英米協調から、独伊の全体主義の方が世界の犬勢という認識が多数になつた。しかし日本の道は、対米及び東アジア経済との貿易が必須であり、対ソ防衛が基本であり、これからはずれた政策は国力維持が不可能であつた。国際包囲網の中、軍事技術の優秀性を維持し得る、自己完結の産業経済圏をつくる事が出来ず、周辺国への膨張主義、資源開発の推進、科学主義が主張される。技術史的には自動車工業がない為、量産システムの互換性生産の遅れが致命的であつた。ドイツの技術困策に範をとるべき政策が優先された。又中国侵略をやめると言う選択肢はその芽を何度もつぶされ破局を迎えた。

この坐漁荘は一九四〇年、西園寺の死去後、高松宮、西園寺公一、英人レッドマン、財団法人西園寺記念協会と継承され、建物は明治村へ移転復元された。現在は現地に再現された建物がある。周辺には、清見寺、薩唾峠がある。

事務局だより

※エッセイ集の原稿はできましたか。締切りは3月末です。

※21年度例会予定表をご覧のうえ、まだ演題がきまつていない方は、決まり次第、事務局へご連絡ください。

※訂正をお願いします。

173号8頁下段25行、9頁上段3、4、6行目 神明↓新明

※出版予定

相原精次氏 『関東古墳散歩』 彩流社

※山本鎮雄氏紹介図書 『社会学辞典』 新明正道編著

「復刻・増補版の刊行にあたって」

山本鎮雄

山本鎮雄

山本鎮雄

山本鎮雄

山本鎮雄

平成21年 会員及び幹事

相原 精次 新井 宏

太田 精一 鯨 游海

佐藤 健一 柴田 弘武

島津 隆子 高橋 由貴彦

瀧澤 中 宅見 勝弘

☆千坂 精一 ○中込 勝則

○中山 喬央 ○鍋屋 次郎

平山 善之 藤谷 益雄

松川 博光 ☆三戸岡 道夫

○森下 征二 山本 鎮雄

隆 恵 ☆顧問 ○幹事

